

内外科類
目



15
4

15
4



18
15
4

内外新報第三十一號

慶應四年五月二日

○四月三日 出羽奥州よりの未状

一 去月十九日 九條殿澤殿醍醐殿へ薩長藝の人数凡七
百人 附添ひ仙臺松島へ着岸 城下滞留致し 以當月朔
日 仙臺藩隊長目付牧野新兵衛銃隊頭横田長吉郎九
條殿の命を蒙り 桑折陣屋へ相越し 新兵衛一人 黒田
節兵衛に陸奥國村々徳川家領地の分 朝廷へ召
上ひ 趣口達致し 以又節兵衛儀 松野庶右衛門 銀山
方本間六郎と共み 當朝日の夕 仙臺城下へ罷出 駿府



其外の御代官と違ひ當地ハ會津近よて敵地を扣へ
ハ故歎真の 天領と相成リハ儀故御代官手附手代
身分如何に可相成哉難計勿論川俣小名濱村の塙共
同様仙臺家へ御預け可相成哉又當地御村諸書物急
速可引渡との 賦合ふて種々談判の上米金仕込書差
出し傍示杭ハ 御料所仙臺御預けと認め相建高札
取外シハ儀に相極り申ハ委細ハ別紙御届書御見合
セ可被成ハ

一會津追討の儀ハ仙臺一手へ被 仰付既又先手伊達
藤五郎人数千人程米澤會津境大原口と申難場の固

め小出陣の由よて今三日桑折陣屋許通り申ハ

○黒田節兵衛御届書

今般陸奥國村々徳川家御領の分被 召上 朝廷御料
に被 仰出松平陸奥守へ御預け被 仰付ハ段先般御
下向の鎮撫使より御沙汰相成リハ間私支配所奥州伊
達信夫兩郡村々御村共取立有之ハ貢税米金其外共不
日罷越シハ請取の之のへ異儀なく引渡し可申且村々
在来りの高札取外し傍示杭建替當月朔日より
朝廷御料と可心得旨迅速觸渡し取計方萬一相拒みハ
違背有之ハおゐとハ討手被差向可申ハ付心得違ハ

致間敷尤悔悟の上ハ速ニ陸奥守城下へ可罷出旨同人相達しハ段家未牧野新兵衛櫻田慶助儀桑折陣屋へ罷越申達し森孫三郎多田銃三郎へハ一應可及通達旨も申聞儀に有之右ハ去月中孫三郎私連名ニ心得方伺書差出置 御下知の否ハ不相分儀得とも取掛儀彼是猶豫差延等難申及切迫儀聞御達の次第承知の趣打合せ其通り取討置私儀も手代共召連を翌二日桑折陣屋出立仙臺表へ罷越申儀依之御届申上以上

四月二日

黒田節兵衛印

御勘定所

一 九條殿ハ當時岩沼へ御宿陣の由
一 四月十九日出湯と申処よて仙臺藩會津勢と戦争有之由よて砲聲をひたぐく相聞へ申儀併双方共討死ハ壹人も無之趣に御座儀
一 會津勢五六百人程も白川迄所小名濱支配所邊へ出兵致し土民難儀の者へ金穀等を與へし付右村々の者共より右の次第小名濱御陣屋へ相届けしとのよし

一 醍醐殿四月七日白川表へ御出陣に相成り由

一 別子峠と申し場所を會津方より長廿九間の陣所
五个所有之に所去る朔日曉は二本松勢仙臺勢官軍
勢繰込戦争は相成り双方討死有之に得とも首九ツ
大砲三挺其外品々分取の趣は御座り

一 郡山より里數四里程西の方より當り御靈実と唱へり
峠より會津勢去る二日朝より官軍勢伊達筑前勢と
戦争大砲打合ひり得共其後の模様殿と相分り不申
外

一 三春候白川へ御出兵被 仰付上下四百人不残和流

尚士分以上陣羽織を着し手鎗を持ち騎馬の者十騎
足輕ハ不残半天股羽陣羽織着用と各小銃を持ち
由尤も出羽莊内へ出勢被 仰付いへども遠國殊
は峠等有大砲其外武器持送り差支の旨御願ひ相
成り依之白川へ御繰出しは相成り大砲二挺兵糧陣
所道具等御領内人夫めて持送り被成去る六日七日
兩日白川へ御著り相ありり

一 南郡侯も同所へ出兵被 仰付凡人數千七百人の由
内千入ハ去る五日六日頃須賀川まで御繰込二百人
ハ滑川在二百人ハ笹川在へ止陣七百人御國許より

武器類牛千疋より附送り相成りいふ付警衛致し参
りい趣去る三月廿一日御國許御発足此節御着陣に
相成りい何れも西洋障眼のよ

一四月中旬箱館出立飛脚の咄に官軍蒸氣船或艘に
て四月六日箱館へ御着同所御被所并運上所等御
受取御船も不残御取揚海船通路被相止いふ付御奉
行始め方々も御歸府も成りがたく此頃ハ如何に
相成りいやと申聞い

但し右飛脚の者官軍御被入御人数等も不存い得
共多分薩州長洲様御人数との噂い由併あり

先達て京師より命い方々も御来込と被存い
一越後新発田候の世子先達て會津へ御出の処未だ御
歸りの程相分り不申よ

奥州海にマンボウと云へる魚あり磐城領最も多し即
ち鯨の別種なり能く水上に浮ひ睡るを以て又是をい
ふと云ふ其腸胃頗る下利を治す領主より毎歳
幕府に貢献あり世に是を知る者懇望して其妙を感す
當時一般貢献廢止せられより如是の効能物多く鄙
地に埋められハ遺憾とすべし

○ 磐城邊の海濱は鮫魚多し然れど節よして生臭く漸く其土地の用を足すのこありしが近年土佐より職人を得て本節の如く製出す

○ 閏四月十七日より白川邊戦争の新聞を得たり猶次篇に出さべし

内外新報第三十二號

慶應四年五月二日

○ 閏四月廿六日清書付寄

先般諸向脱走の者も不ふかしく執り相争へし是程に配る内脱走の者も有しはた名茶子と云ふ中同く有る相違をいふ今に不十等局も有るは是日中有を執個に中同い
有る通る向るはは相違い

○ 水戸表は清供又た為所用は是をいふは途中は返す

下抽之後布衣以上ハ正人馬形以急一落筆代一日一人
人量不百文治をハ外百文馬一丈以付是也文治計
也四百文ハ一破地洋留申ハ清定端入用馬厨科計不
布衣以少ハ分去道中兼破是洋留申ハ由是通諸入
用計不思人馬之候也布衣以上以下ハ由是通之通至
候然以之計不ハ間水戸表ハ是是外而ハ急之候
既相之候清定是是候ハの計書出以極ハ是候ハ
右ハ通之向之候ハ是是候ハ

○同日月廿九日

徳川様之御殿今廿九日辰刻

西九上御登

菅原殿以極

大越督官より御沙汰以付

一揚大納言殿為

御名代清紙に成以奉

懸之御殿清事所道家所相續之候別紙之通至候

御出以間向之候早之候相觸以事

□□伏願之上也徳川家名相續之奉御家以來之功勞

也候

思合格別

敵意を以て安泰を助へ

治出外事

但城地縁を為し汝を返す也 治出外事

○

徳川様之助様事今日上

上様之身称

上様事

茶上様之身称

右へ通す相編

上様事謹慎申す旗本清家人月代不利相違を以て
明朝日上皇尚地へ存せし者ハ一月月代判り相
違ひ

○

今度

所相續事 治出外事付明朝日付時存候以上以下
小役人一級一人了服物給麻上下着用田安沙館へ
存候事候事

但脱隊遊撃隊等ハ結合し者ハ内沙館等

- 一 古式朱金
 - 一 又古利
 - 一 保宗小判。其分
 - 一 正宗小判。其分
 - 一 安政式分
 - 一 享保大判
 - 一 慶長大判
 - 一 元禄大判
 - 一 新大判
 - 一 寛永鑄錢
- 式百六拾五文
 - 二百一拾式五文分式朱
 - 二百九拾一拾式分式朱
 - 二百拾七拾五文
 - 百六拾五文式朱
 - 七拾八拾五文
 - 七拾八拾五文
 - 六拾五文式分式朱
 - 式拾六拾式分式朱
 - 廿四文

- 一 寛永銅錢
 - 一 文久銅錢
 - 一 天保當百
- 右ノ通至京初大改督ナリ序觸出シ相成至以事
- 因日月
- 拾式文
 - 拾六文
 - 是まぐの通至

百六十一

内外新報第三十三號

慶應四年五月六日

○或る一諸侯の建白

臣 照得 願者 後々 嗣下 又 尊言 上 以 高 春 德 川 □ □ 連
 日 強 旗 又 祭 砲 し 及 狀 昭 白 於 敵 方 々 々 々 々 親 王 殿 下 々
 以 々 征 東 初 王 の 所 々 々 統 帥 進 軍 身 々 々 々 々 々 々 共
 々 所 々 向 不 祈 草 木 披 靡 々 均 々 々 々 大 小 侯 伯 敢 々 抗 命 以
 方 々 々 々 若 由 々 々 々 大 旗 の 下 以 呼 振 々 々 々 々 國 東 天 險 の 二
 嶺 々 由 強 由 々 々 人 の 統 々 統 々 諸 々 如 々 一 丈 由 丈 若 不 仕 江 所
 統 系 の 士 民 由 々 々 々 欽 皇 孫 在 天 裁 々 儀 以 □ □ 義 々 水

戸表に退身能先創業の首領を冢き固く守護の兵器を
出せし奉祀首領の家来ども 勅命に應じし文と野し
勅命謹言仕 天戈又血ぬるがしして御継責の御執意連
月と歩びしおまいた何故に々如此に速容易に外
皇威煥發せしむるも中あがく冥東の士民積衰の
御智を承け固循俗生節義の風由地をたらしひひのく
や又たま又其罪又伏し 王所の抗を御わく心名分の
奈まぐつらざらぬ知てぬ水際伏仕ひ奉り以て此を奉
がら方今

主上幼冲天下の大政二三陪臣の手又出く 王政優古

と口実として実ハ私利を嘗て征奪の汚名義於敵の罪
状を宛ね不慮の義と輿論もこれを乃く其上積年の霸
業久しくた平又世に士氣振るはゆとも致翁の兵をく
節操をせあくとせし強く柞又徳川家の系を能宗風
又梳るる又休し多おの艱難をりつて天下を凶惡を収
め億萬の生靈を慘毒の中より救ひ竟に仁寿の域に躋
せし末に百六十餘年の間 朝廷はも深く清依頼多る
遊累代兵馬の 大権は委任は有らざる上を 皇位は諸
寧下の儀兆を平の化又治し其功徳今も人々を固結以
多し其之の家連枝の諸藩に其子孫血統の親族後代恩

願の備屬と苗對忠勇其臣の後好くいへむ宗家又仇し
 之宗又教し以て我を恐びがくぎ節以て假令一旦 王命
 の已む代はざるよし軍門に加りて以て其情實天日
 に対し以て面因由有るまじく人々正及に復し以上ハ
 復名の際向背の勢ひ素より計てかくくハ交徳門旗下
 の兵隊を駆て兵器軍仗充備し以て居候をりつて武然
 賡費□□自ら指揮以るし二三仇怨の屬を相手取究を
 爾下は所へ衡を中系又率ひ以て十分出来申登く之
 以て 皇國の兵禍已まざるを釀し至幸百萬の生靈を望
 岩は若し内地紛争して弁夷之虚隙を乘じ 皇國令

既の一缺を生じ以て傍く我を立玉と以てハ祖宗以來積
 年為 王の誠意以て成りて以て之を以て極く者懼以て多
 羽伏兒の縁伝は情寧を論せ以て姑く之を罷り依し附是の
 表を替て以て皆然と形ハ替りて才佛ち入り春火後信を
 尽し其後或つとも辱く偷し保く戒め百方苦んを極め只
 管 朝廷公明正太の清平を以て終ぎ替りて以て故漢代法屬
 あらび又士民とも依違交し難く 王所へ鎮撫を受け
 あやの通り容易に事成功お成り以て其後之を以て就て
 ち報たし寛典をりつて家名順来とも舊のごとく計て
 是□□我を優容く由ははるべきありと事由は其出に根

仕てくくたも辱くゆくの世世と恭順兵を以素望と懸
 しい今出来がくく関東に津交を瓦解と大成に終よの
 東苑を政府と姿を為し生民の膏血國中に流ぎ兵燹の
 災休む時有く百安ゆく脱走多し支兵と攻守し區・鞅
 掌ひ多し以我を 王師の大典に要領を故ざる衆の
 以我を打く 皇武を黷し以とも了り者寛典の由交を
 不_レ以 仍出因循仕いへむ宿憤然いそ窮兵突出寛を
 関下と海へいやう_レマお成た燭照龜卜の如く又存らる
 誓討と機令寔よ以く不承く由大事と係でいけ湯合と
 其_レ有_レ符_レ□□_レをた生憂と塗炭よらる_レめ 皇國の乱

階を生しゆてを 皇徳へ對し其照入の微衷をりく
 罪名の曲直為一言不_レ甘怨慕望我在已恭順の終よか
 ろく缺典を_レ 王師よあわくる所威典已におまを
 寛典の 仍出まを_レも_レ大兵府下_レ守屯せしめ私
 情を恣あ_レ市民と商賣の利を失ひ農民の耕種のをと
 失ひ物力彫耗して人生無_レ物を極め諸藩も隨_レ疲弊よ
 あまび終よ_レ人心怨嗟離叛の念を起し 王政所仁恤
 の所執言つづきよ_レこ_レ是_レ在_レ以_レ外と怪_レて_レ平_レと_レ怨_レを_レ不
 が_レ其_レあ_レお_レ件_レの_レ通_レて_レ者_レか_レよ_レ由_レ交_レを_レこ_レは_レり_レよ_レく_レ津
 関兵お成のやう仕てく_レ 金津素名生地 於憲よか

世のりの陰翳に 物出四所安堵の上令律義の正家へ
孝徳の意を賞しお成ひたる懐綏遠大の法親模範の忠
皇任ももお叶ひ下り在りて極激切屏營忌諱をかんて
みど言上は殊に誠惶頓首死罪

国四月

□□□□

右或るひの佐賀侯の建白ありと未詳

○又月報日出板ダイムス新聞抄伏

予か土曜日午後二大納して布告せし □□公とて

兼び大権を握らしむる新聞少しも疑ふなきより
むをなく文面ハ 所門より王臣への由沙法を傳せ
あり

此間ハ 大君沙府府と沙法とありて廿六号に出
多れを省く

あ文より考ふる世は再び軍職をばえてくる
なりまると沙法は長州を陸軍監督長官と海軍監督
に任せしむることを紙記載せし又推考するに □□公
ハ外國交際の職に任せしむるに

□□公を子福府ありしと見るとも遂に貿易を盛に

せんは空力ありし
最下右平と維持するの命議終了二週日ほどは
を振南方は布告ありしと聞て去る一は沙汰の
故確報を以て忠告せん

内外新報第三十四號

慶應四年五月十二日

○仙臺系は赤松と皇朝の諸侯一達は素願
以手紙致し陸奥守兵隊正大弼系會津若松保津退付
く先鋒は 以付陸奥守兵隊正大弼系會津若松保津退付
陣門に相裁し降伏謝罪し兵隊正大弼系會津若松保津退付
變に同津重役の内白石陣所より津出張相成以標榜
度以上

同日月四日

上杉孫正大弼家老
竹俣養元

千坂右衛左衛門

伴達陸奥守家老

但木土佐

坂 英力

○鎮撫府參謀小菅城平藩への津達書四通

奥州平藩

右先等々熱腎府上皇法相成以付命。茲撥人取末
白十日中江白川とて差然此事
但近比以対相高々人取て差出た在る用之者了成。夫
相者き難装以て出張了有之事

同日月七日

鎮撫府

參謀

○同十五日

平藩

右今日上皇會境に差入甲子道在廻審付候了致事
但木小隊宛出張之事

○同十六日

平藩

右今日上皇白川宛奥州入口警備了致事
但大砲走門備付此事

○同十九日

平藩

右之坂口出張人数一先引元以極申付以比在白川を
人之付急進出張下有之

○奥州上皇出府之者也

一 同月上旬之薩州船多人被乗但仙甚寒風^{サテ}浪^{サワ}港へ入
津古里初合之艘紫ぎ^サ所^サ薩長流之藩の人被らそく
上陸し紀藩相陸里船富以多^サ以^サ

一 九条殿下是と容賢堂へ涉在^サ多^サと^サ同^サ同^サ月^サ初^サ旬^サ新^サ法
殿に引移り相成^サ里^サ屯^サ上^サ方^サ勢^サを^サ人^サ由^サ附^サ添^サを^サ仙^サ甚^サ人

教以之警誘せんとす

同月中旬より仙甚以之候之位殿上皇来以之重役清
出^サ以^サ以^サ之^サ付^サ會^サ之^サ養^サ以^サ候^サ後^サ清^サ法^サに^サ相^サ成^サ周^サと^サ沃^サ殿^サ連^サ極^サ
上方勢以引率以之来沃口へ清出陣之意来沃より被
人召出今被付會以候付清法に仕以候とも一併付會
以^サ何^サ故^サ以^サ以^サや^サ警^サ藩^サ一^サ日^サ疑^サ惑^サ仕^サ以^サ来^サ沃^サ口^サと^サ以^サ方^サ人^サ被^サ
以^サ之^サ相^サ固^サ以^サ以^サ之^サ由^サ人^サ被^サ願^サ内^サへ^サ清^サ入^サ以^サと^サ不^サ及^サ以^サ
有^サ相^サ查^サ以^サ以^サ之^サ等^サ有^サ之^サ右^サに^サ付^サ沃^サ殿^サ連^サ又^サ天^サ童^サに^サ清^サ入^サ
のよ

十日五日の以鎮極使醍醐少将殿白川に清入城

十七日以仙臺南勢之軍勢白門と引たり以仙臺勢ハ白
石を退陣す

○後四月廿三日出警城ノ軍の来帖

去る十六日甲子道尔派として相越泰謀方附勝見若太
丈附法會藩基場より石を出張之索俄又大砲亦出せ
至丈より内路志名子村と祈り會津見張所有之石
場不引之双方院殿又相成む泰謀兵果之申怪我人等
之々夜に入内陣す

日十九日早九時以之妻藩上至使者と以之會藩世人
往柏村白川半程を出張之申中越し以舟即刻白門城

へ兵出泰謀方付へ相越し以之申つづきも打掛ひ以依
江中聞勿倫當時會藩降伏歎歎申の事之付押安以之
ハ有之石安と泰謀附江中以下

云妻藩三百人従 會津津蔵入甲子道

二本松藩百人従 江戸口

泉藩四十人従 石門口

平藩八十人従 梨抄入口

白門城中二本松、柳倉、泉、兵、薩長、龍、人、救、外、子、人
係、以、之、相、固、也

門外日曉六ツ時色會津勢と申以之甲子夜開門之妻勢

へ付かざる時討戦率城中より参謀を人馬馬引く馳
 付指揮以多し以ゆき遂に敗走し及び更し平勢
 の関門に掛るは是又敗れ寄手速様城中に目がけ
 裏表しを参謀并下代官を徳三命の免責ふといこ
 以呼を多し給う給う切止し中津代官の行故
 の悪し以や相ふり不中津敵より不中津防禦以
 多しゆきと由経兵急に攻詰りゆきと空を打戦し
 以のそゆきとを人中中其の者多し其内城中六ヶ所
 放火し大燄城人相見ゆきは是の事秋より間諜思ひ
 此居に申述し落城し相成り参謀以下は殺す

由仙基に退去し執鎮極使し以方相多しゆきと
 以所へ平層屯下し是中少隊繰出し持城固めゆき
 形く参謀付仙基為是破健次と十者存出参謀等
 と敵方六七人木蔭より發砲し戦率及びゆきと
 怪我人多し退く参謀付あり参謀來り指揮以多し
 内人救引揚八里程退き小平村へ一向廿二日の陣せ
 里長層参謀世良修義の戦率の一昨日仙基引返
 去り参謀某戦率と柳會人と組討有る最初戦以
 参謀服せ打方多し會人肩を不負ゆきと引組ゆき
 の参謀ゆきと見付るゆきと來り終り會人を切殺し

中備萬素より付合く念多しゆ一防又決取し且
及方孫九より打上げ死傷等文に多しとの事四時
頃のころ引拂ひ城中を人々居合せ此合勢之に而
人より市中見出せ難焼坊不れ志がゆ中より別柳倉
落城し中是の官軍の跡兵逃移りしに付合屬より攻
向ひの事と云はれしなり

内外新報第三十五號

慶應四年五月九日

◎高松侯への 所沙帖書

其方家來共在坂中處正月三日後不容易時終又之別至
以脚車對 朝廷如何儀由有之掃相聞へ此止官位入
京退付也 後出少事其方より於之に在國中以之毛取存
知多く早急死に以不徳川□□上京に付家來共兵狼警
衛中付存登り以途中伏見表に於て混亂中 官軍と
以不相あ得く糞砲仕以次第其也又大不敬之罪を以て
出之に重臣小吏兵庫小町又在赤門殊戮を加へ首級を

出し將軍宮へ歎邪仕ハ者素ナり 朝廷ハ世ニ忠勤
 を受し中ニ心ニ慮シ有リ付テ罪ノ道ヲ相シ為ル明ク儀ヲ出
 以テ付テ格別思食之以也 固シ食届不日以固東返付
 之節出兵天朝の為忠勤之材之實効ヲ顯ス以テ於テ
 其功勞以依テ前罪所省免テ相成防兼之所沙法之旨
 由有之以之右出兵之儀之已海陸沙法人殺沙法配當相成
 居以事以付沙軍費金調敵被是實効相之居以テ勿薄賞
 前出先家末不束ト也 此中若ク大義順違之不相兵次
 才全之家末共之示方不以届又相適里以事以付此法
 沙法之旨 仍付之処格別寬大之所仁惠之以之僅慎也

免官位は復し衆徒以て國論一定轉て了勵忠勤様
 所沙法以事

但禁封 官軍殘率以多し家末共所置之義本文沙
 寛大之旨執し準し隊長以上重立以者死一考を減し
 永禁緇之考を之きの考既之重長為人重刑之考し以
 上之其餘考之刑法之考考之乃之沙以事
 附之右之面之所持銃砲之考之沙免揚也 仍付以衆
 右政官代軍防事務局へマ差出以事

○福島よりの來状写

一 同日廿六日於六ツ時以薩長彦根大垣等之官軍凡

六百余人余勢白川砲白坂宿より押寄せ間登るに
大戦幸に相成り官兵宿初めに縁より勝利と相見
へい家合兵一日奮戦官軍方敗る芦野迄を引退き死
傷致志を合謀方生捕ふ捕ふより有る全く勝利に
く者十七級相さるしに合兵死六十八人手負百
八十二人双方とも死傷多かりに

一 仙基居石門大和生介とも云ふ人程廿七日郡山へ着
白門へ出陣し執跡より七千人許り同所へ繰出
て相成りしに福島に関門相建仙基福島居るに官
兵に改め敵軍に事しは座に薩長督同所を以て十人


余仙基へ討めしに

一 九条殿の白石沢殿の山形所在るし中事碓礮殿に
何方より在り相分天童山形色屯在る官軍へ
仙基より兵を差向けし中執りしに

或人の伝に野村大田系が藩医官軍の教に於て芦
野迄出張怪我人療治し中凡二百余人余ありと云

遠藤但馬守の通村下板橋平尾加所侯の邸内に宿陣
し元津代官所八万二千石の地の公事を司るを
官より命せしむしが世にの物語しきり付悪徒共農

商を擄まひ而して押入り劫奪をなす者殺るる事
何所由農商等集りて防の用意の事教まひ心掛つと
ど程申し又其時縁つひ然るに去月十日日午頃其時
郡下土交田村俵窪と云ふ所の農家へ歩兵極の者六
人押し入令子等出まじむ執強倭又乃ひしよ其用
意の事有れを近邊の者ども手ひく其仗を引きか走
せ集りしし破歩兵少きと逃出せしと返かけ上練馬
村大門山と云ふ所はく二人打死しを人農家へ匿ま
しを生捕介之人の近失たうと云ふは早速と遠者
族の陣所へ逃出りれは所刻検使來り生捕死人も

陣所へ連りて後入衆の後居候も九洞洞海立
寄方農家へ茶代として令式米置置きしと云農人
一門諸事簡易多しを感し悦びしと云
四ッ谷西念寺の所化僧  ある者四月中逃走致し岩
井戦争の事人討死し多しを人の當時某隊の内
に居り申又當部保山の落徒六十人解脱走し統隊
養を居りしと云ふ豪僧も其の許るものと云
を

○
け表に戸市中に掃て官軍方人殺し勤めらるるこ

とに成りたり

本月三日不駐が谷津嶺硝薬へ官軍土少勢は警固
せし安竹者もるゝ多人殺来り談判有るそ其節は同
遠に相成りし

同日官軍方津使上野へ参らるる重役の人と山内へ入

る従者の廣小路常樂院六阿弥院のちに供侍す

四日五日越中崎遠は官軍方大砲發放有るし

砲聲夥しく聞ゆは黒田勢ありとぞ

同日橋本少將敵馬上風折烏帽子袴衣は東叡山に

は入る騎馬六七騎の供奉せし督府の津使ありと

しよし 籠前人殺警護あり

或ハ三条殿形もしよ同日八ツ時を以て

形をきり

○

此頃本郷色の仕立職人あり白地直密ヒタレの物あり

こゝらへ居るとの風聞あり行きの注文ありやま

何の入用なるや

但又不人前ありとの噂あり信偽相分るべ

又月四日津書付の字

と振津初年と義又付津後とと義松平確堂殿へ津ん

此社在し振 大熱督府より社 治出以執事有之
以付中頼とて取以万乃ん其向とへ了其社以

内外新報第三十六號

慶應四年五月十二日

○英法如何抄譯

ウイレルム王治世大凡法律定まる國民は自由を以
てしめしが未だ新聞紙は其の治法を知るが如し然る
は高貴の新聞紙用板するは甚だ自在なりしからる
高貴なることを記すことしづむの實事を記すは妨げ
なりむ由た平を妨げ名を破る人を難くせずむ
る浮説を去るべきなり氣を付るべし但しつゝのや
ある説は其れも私に記者を罪を為るべし其筋へ作

へ曲直を正す

カニニ先生曰く新聞紙中の勸善懲惡はあつたが
公記あるを知らざるものた英國の法正大公昭不
るが知らざる者といふが

○同日月廿七日書付字

榊原式部左輔使者

從本録市石朱門

右と極水戸表は所謹慎に付所機嫌御伺として
出に於回安を形湯大久保一節

○同日月廿九日陸軍局へ書付し書付字

私又黨と結び兵隊と隊名を設け先其を結
以執由有るは陸軍局の内上を彰義隊兵隊の隊
へ各課本役を統し相加里又中合と上私又黨と結
び以者有る我と相聞へ以るの外に事以に右極と
不相成以百生隊支配向く者へ表發して中後兵
是迄彰義隊兵へ加里居る者へ行きて小普清入
後し所抱の者の其才一代小普清入て中後以百名
兵網で中聞に但支配向く者更に見るは身由こ
まろ月然情実を通じ疑き下上右極成りき以極
以るに不相合に付極と又中合有るは神忌畏を

法無沙能ハ

一 右改官由今以テ法多端以テ又ハ法制度等々諸侯方
無城之方由二本道具先箱等法持之世々方多分有
之其ト法振キ多分有之或ハ法遊歩等以テ又ハ礼
界トハ相見ハ不ナリ

○八月二日四日付よりノ法口書

上振田安法形也 法引後法振以テ付法役人出仕
退出之由表門一方通行ノ事

但法度安向テ是近ク通也

下馬所

一 田安法門ハ長巻西南角矣東陸

一 清水法門外

一 叶振法門内極溜角矣東陸

右ノ通也

○同日三日法口書

結々助振法事

上振と法称

上振法事

亦上振と法称有テ相違シ

右ノ法旗本法家人同士限中上ハ系以テ之也又新也

對以涉稱呼以を無く以乃自地之差別不混振了致
有向く以不致其以

又月

一市中巡邏之勢想之官軍方以之と致以守是と致
仍付並以巡邏清免と致以

右し通又是く巡邏は仍付並以向くへ相違以万了致
以是意以物くハ途中陰小銃等相携へ付未致其万後
以

又月

一越中崎之むかへ官軍大小砲網練以多し以旨

大越督府より紅紙出以万向くへ了致其以

又月

○

上総本支隊を以て一揆起す鎮靜の爲めに戸よりも
退く出張又相成以よ〜いかある條もやあぐ生定統
を以て他日確報を以て次篇より記載を志し

○上総三層に町達書

小栗上野介近日其地とあ桂田村とあむく陣所を以
以相據へ加へ砲臺を築き不容易の合く有く越諸方
に進維陣捨深く加探索以交道謀判然上の甘對 天朝

不埒五極下の人□□恭順を志す由相成以て付返揮
く養之藩に付し向國家を為め同心協力し神忠勤
勇一子又余に付し又速に陣へて中出先鋒佐隊
を以て一巻殊戦了致事

四月廿二日

東山道總督府

之藩に相平右米元板倉之計改右井鉄丸あり皆官女
口号又裁する事の小栗仁右衛門屋書とあはれを恭順
せし程を傍藩より之屋と次号又出さる

内外新報第三十七號

慶應四年五月十一日

○小田原の報告

清西侯の世子英二侯彦羽倉園田為武百餘人小田原迄
に屯をせしが精銳隊致山岳鉄右衛門結極方強 治討
去月十七日出立あり茲越説諭以多し然し先甲府表に
あはれく懐懐る所を以板橋屋き同廿二日府内屋有る
女曰日多野羽所へ清願け又相成以清達書遠近新聞
才八号又見へあり

○上野桐生よりの來状写

一 去月朔日官軍先手百人往相生新町山宿

一 新宿村角を清助と十者二日官軍通りの節途中に官軍と離傍以多し以又因之即時に拵捕相生所旅宿に引立親族を勿論材段人一月款致以以在一切園入を以首を討ち者前日大向之町多高不宿寄に之石取以の及人とも獄門に掛け中以清助母傍親以多し念佛唱居以不向終悲傷之候に狂乱し之入水しお果中以

一 足利と中者出途生滞之由以之引立高表を引立以

田某と中者出途生滞之由以之引立高表を引立以

交降款致せし以付免し降参老人殺に先加へ引連是中以同村入舎以之為田大内為陣を守近者某と十者是も同引之座あり之引高表へ入軍也其節陣を表門とを砲發付入也以之

一 大向との山中水泊村に星野十夜右衛門ある者以之岩鼻支配不元締等致居て家富て平生善く施とせり然るに歩兵を匿し是以外之疑心以之館林藩某右親不とも傳し以引連是以款

一 高尾山兵隊以以先聖が足利戸田家降伏し御主人殺百人為出先手と命し且又佐野陣を掛合し節和談

不乃屋陣を助後させ武芸殿のこゝろに
死に揚子相成
マナ

或説は之招武号に載せし館林の
信多と信二然
りや存キ

一又日夕方佐野の堀田勢百人程に宿六日堀田勢出立
夕方彦根勢六百人程多し宿六日計でゆく途中とて
引返し山外街道に巴で山外相通で六十
一官軍若松より沼田へ押掛ひ候と云若松候より
堀田大砲を備へて重敷を中陣に之を寄り沼田に

要害よりしく願地今津候にて今藩立入て居り風少
有之是又向ひ不^{アカツマ}中若妻殿に掛り以執り西に

○補遺

○上総姉が誘色の説

去月三日四日下総國新橋宿色より於て戦卒は晩去隊一
手の上総國へ引れ又井宿又下村へ九人殺之百人隊姉
が誘宿凡百五十人貝宿村今宿村に凡百五拾人官軍村
又凡又拾人程都合六百人又拾人屯集し一守之人殺凡二
百又拾人又新橋宿より東合通で上総國志里台村真如
院へ引れ世人殺戮之甚倭出し以へども期は後述に其

又相聞也同日七日拂曉官軍薩長徳本尾田茂也佐倉大
 村人殺凡之予人同八嶋岩と相進之以節脱走兵士之
 内臥拵七八人同取切之官軍之拵七八人討死手控く
 引上ケ以に付同軍一門押出し五木村及井岩に攻掛り
 戦事又相成り脱走隊討死之人怪我人不お分戦争勝利
 以をゆくとも人数少く以故姉が凄岩之方へ引揚殿と
 し之女人直上村之屯箇せ官軍戦死百臥之拵人手負
 百人餘有之中史より之手又別走一手の山通り一手の
 中通り一手の溪通り押来り先鋒二百人程脱走隊殿付
 と相戦官軍六七人討死脱走方二人討死討し右隊の官

系村へ引揚り官軍の三隊襲ひ来り姉が凄岩出淵村
 津宝村今多村松が村畑木村以て合戦相始り脱走方死
 傷五拵人程隊長某出淵村以て腰を斬り自身を掘出し
 きんとして死差以て部下と士志を掘出し焼耐以て
 逃ひ自ら上帯以て巻縛り戸板に坐り立退り中へ走人
 隊丸の中り生捕らる斬首せ給右之通り隊長疔を交陣
 又直接り兵卒以て石真り岩村外之ヶ村に引揚り負百
 七八拵人とも交陣へ立越り亦上り翌八日曉五火力船
 之艘以て出出し仍先不相分真里岩村外之ヶ村に引死
 以兵隊の日夜殺乱し内之百人程の大多数滅亡せ入り

翌九日出不出をく交教札を兵士所より相集り上候
 以て加て以者凡六七百人程に相成途中山宿不相分
 同十一日以下総國船子にキテ四郎左衛門方を便り退
 去り多し猶船備更度者相頼り以て左小舟に仲巴で
 出来着い中野里に交け同下以て從又散漫思ひく引
 分を退い中野又官軍に戦死に格八人手負格七八人程
 有る去る九日大風多し節吉里若村吉如院並に村と村
 以て人家之形放火し真如院に埋有る大砲二挺小銃百
 七八十挺同不尋子村と有る小糧米四百俵程と分死
 了と本更津宿へお移り十一日人殺八百人程同不尋子

船以て引れ五百人程の同宿に滞在し四百人程の姉が
 勝水野日向守陣屋に長巻を放火し分捕亦多し多船積
 と上右人殺禁と同日同不出帆引掛ひ三百人程の
 陸路又いり井宿迄下を乘船以て引揚同日迄の滞在の
 本更津一手のよし

七日戦事と節脱走方以て兄の是れ玉劍キタ蒙り以て弟附
 添真如院以て介抱い多し九日迄滞在い交兄の劍以て
 歩以難出来に討敵を入せりたし自殺了致弟は退
 き下中と進め以てゆ兄を見去て去りてを倫理
 難相立とまひし候し合以内敵襲ひ来り以て討見を脊

負以同院表に先有之に一限は名に支官兵見出し為人
とも斬首の多しに中近村の者之是を聞て皆落涙せし
とぞ

一の宮加納遠江守家来とびし勝浦大目主悟正陣を
浩く藩士脱走の中相少中

内外新報第三十八號

慶應四年五月十四日

御家名に依て付是書に款願書

蒙正月中 上様大坂より御帰城の程以後 天朝へ
對し法及心の類を以て問罪の師に及向て御承知仕上
下惶惑仕し處 上様深く所業明法謹懐赤願ふに御返
去はるに只蒙所謝罷り 仰立に之を御承知す 日光所
門主様法始に法當家此一門兵に重立し法役人より教
交り款願の程より 天朝より一向に御許容辱に
遂に 勅使の御向 勅款願然し由り 仰立に之付人

天下紛擾外夷圍衛 皇國危殆之生靈塗炭之失所之至
り及ハ必然之勢ニ涉る 何卒此際沙洞察ニ成下
大勅督責ヘテ 仰立速ニ上下安堵仕テ根奉ル小左ハ
ハト一旦所蒙之決為を謀リ脱走仕テ軍ヲ帰向テ有
所 獲得在リ 王師を勞サズ人命と戕ヤサズ自然鎮靜ニ
仕テ中恐沙家之決回復を奉懇願テ至誠ニお多クハ言
果シテ美事多ク之可哀ハ要是只沙家ニ決為ラセテ然則
天朝ニ決為ト有ル 天朝ト決家ト有ル為ニ沙公力
ト為竭テハ即位方ニ生靈ニ大幸ニ有ル依ニ同志一
同連名を以テ此後奉懇願テ何卒決家ニ相續ホシ候ニ

勿論速ニ安軍所解兵ニ相成國平穩ニ屬スル根沙家
並ニ成下凡根仕交私共思忠痛哭ニ情ニ多ク敢テ鉄
絨ニ服以犯シ昧死奉教以上

閏四月廿七日

同志連署百十名

常州真壘郡某村の百姓去月下旬安軍ニ役使され莫妙
白川へ進リ之途中會兵邀へ戦ハテ必敗走ハテ長
括二三裨官軍方へ分捕蓋以閑テ了點檢セリト小銃等
外器械數沢山等之官軍勢馳集リいつとも好獲物ハ多
ク少ク喜合ヒ居テ多折ト地雷火相發 千五百

人計し人数死傷おひききし潮に又百人程引渡りぬ
立退る途中後の方より又會し伏兵起り散りよす計
成右人足も這々逃げゆりを執怪衣人八舟三艘へ積載せ
鬼出川を引ぬる由

此後虚实不詳 且夕日之戦なり代知る事なし姑く
後報を待つ

○尾州より出府し去りし

一尾州北へ迫國之旗居屋敷に建る既ニ孫堂侯ハ玄
葛屋しきしつふふに檢地代打りし
一名古屋より四十里程の内福島の関門より尾妙家老

山村甚々遠しト者守るたを元此所北に士あり

後府より江戸まで所々の関門

江尻宿新築

此所より手形きし印紙引替は紙を川崎宿
へきおす

沿津宿関門 改め計り

新根宿

小田原宿出入とも関門有る改め

川崎宿関門

此所は江戸より系りたる者ハ参謀方より印紙渡り

差出し通る

○野物大田系より来りし人此咄し

- 一 結城侯ハ二本松へ引取老侯ハ何方に来らるやわ
分らず強玄少く城又募り空城同根之由
- 一 下妻侯ハ水戸下町華光院へ立退居らる事
- 一 下館侯同形家来之區半玄へ脱走ハ年一居、執
- 一 真玄治元凶代友山内原七郎王臣と云は居居る雲那
須郡の百姓とも集り安軍又小銃之々を向いし余
被害は成小執り付保七郎支配亦死絶ふお立、庶
り、尚時官軍より紀ノ中より産ん

一 同四月廿四日脱走隊并會黨とも八百人計なる三斗
小倉通り出張し如官軍長物大垣守初室大田系勢案
内より笑谷村と中平へ繰おし同平より戦多お味苦
戦はるしと云ふに勝敗ありと云勢ハ培系へ引揚双方
怪我人亦死々々事

一 同月廿八日要妙白坂宿場し明神南不會し人数八聯
隊五百八十人余白川より押出し陣を張居る如安軍
因物薩物黒羽土浦し人数千人殺出張白坂し陣へか
そい加多、雲塚明神山し定伏えお殺し官軍もさし
討とお成討死多負かお知れず中川へ死骸流と出

兵士の死傷も甚しく、大勝利を以て白川へ引揚
居る事

第三十五号に出り、福高の未状と見合すべし

二月廿八日、前書に皮軍白川城へ又々押入るに付、少
人殺しを殊に成城下焼拂を返すべし

第四十号又志るべし、五月朔日、戦りて白川城
は官軍方より、いふ説と符合せむといふ事、眞
説あり也

内外新報第三十九號

慶應四年五月十四日

○五月朔日大垣侯の届書

米女正分隊人殺野分、芦登隊去る女、同日曉出立、白川城
より、三里程、手あかゴ系と申す、進軍し、手白山林
又城に出、及散砲より及び、故薩長、兵隊の兵、同とく
相進し、至九時の時、死力を盡し、攻撃し、以て、彼は、死
我の寡陣、又討死し、負ふ、又相成、以て、白坂と申す、退
き、皆、時、休息、為し、押寄、下り、遠軍、儀、以て、大田系、左陣の
薩長、兵、隊、藩、より、浩、壯、付、者、死、儀、の、事、曉、天、夕、の、苦、戦、に

て退く疲是果以勢之者故芦野等と退陣せんと相決し
同日八つ時色日暮へ内陣兵力を養ひ死に在りて
以る此所より敵の陣中上り
討死に負左に通す

討死

隊長

高井初右衛門

日人組

川井徳七郎

松井於兔彦

小倉森代二
林 伊右衛門
萩野孫市
川合盛之助
野原芳之助
子負
砲隊
内田健吉
猪井工
銃隊

清水貞之丞

大徳寺二弟

高木貞長

右澤為二弟

後若重二弟

因云去此の戦ひ放き日滿の至んぶるし死体まで為り確水作
にかみ居多くと記甘し書ありと甚し其に虚説あり

○常武列藩士の事述書

先般房総之地城徒張抗に付進撃し初忽竄去り即今畧
鎮定し乃び退く巡撫を為りて農事繁忙と秋に命し軍

兵引率多し未だ少くハ及宿支及之煩勞由り有之者今
廿日凱旋ハ枕之ハ毎々 朝令之遵者藩大義と在別し
曰民之教海最下為緊要事

但今故軍宿苦軌軌緩急之節を曰藩列藩相共ニ救
應除穢之亦分際然し有之者

後四日

東海道鎮撫兼先鋒

副執督印

麻生藩

松屋藩

水戸藩

並河藩

安戸藩

○新下雜報

本下二回工何隊多きり八十人程ありしが廿日の官軍
の指揮を交する事と成り大抵手お管領の在りて屯集せ
て其隊中より二人の兇徒あり之を捕んとしして圖章より
ひしき何事も勇士に之隊中二人を切伏六人より手を負
せりて其内より一人の付れりて一人渡邊某と云者あり
つらひにけりて又何れを在りて切抜しが遂に或る官軍より

捕へられしと討合中又砲發せりとのり二發のち
是を數の味方と打殺せり又月七日の事なりとぞ

又月八日の秋大風あり麻布谷丁ある南於度屋敷の
崖^{ガケ}崩れ出し其下より何れを一人の内にのち^{オシ}に壓

殺されしと云ふ人の上方向へありあるものより老母妻を

不仕之人なりと實に慈悲心ありと云ふなり

し連るる者^{ガケ}の崖^テの居
おれんことをしり

又月九日深田の人数山嶽硝薬より火薬八十車ありと
引出せり

○又月八日彰義隊よりの届書

為子

撒兵

撒兵勤方

孝兄弟

吉田要之助

曰

秋元系七郎

正守居支配

保子

正小人

改正系正介伯父

正田友三郎

清子

伴辰徳八

陸軍個及下役肝葉

文若正介甥

関 規矩寺

曰

右之者ども此七日夕七ツ時迄皆申之傍所瘞者総若
 迄通り掛りて余侍体之者三人以之酒具の上にも
 有る引通りて人々へ悪口乱妨及以極子然と訊七
 解隊附屬歩兵ども通掛りて余は流石右歩兵走人切倒
 介斗人へ手麻負を色程ねどもへ由同様切掛りて共
 強使に押さすとなじり様存在以内吉田要之助外四
 人正子麻内負りて付毎接右之内走人討果し介斗人

逃去の以付海邊掛約の楨町迄はて日盛く者一為人
仍遠の故為人との討當に俵引九の申中聞以依る世
限の届十上の已上

○

去る之日「ヒュルキユ」と云外車蒸氣船日の丸の旗を揚け

■ 一入津せり乗組の皆英人なり世和の 船迄はる
英國人より買上られしより 船の六第五のトルと

○

山形戦争の詳報を好くし次号より

大系町建白書姫路侯歎歎書等追記載まべし

内外新報第四十號

慶應四年五月十五日

○ 姫路老侯歎願書

續て其哀訴に今般之人□□恭順謹慎を一念の所を
敵國且祖先以来治世の遺教を以て思ふ家名相傳は
仍付傳はる有 敵意を程々感佩の同氏忠懐後之家情
繋る及仍屈不中以上を遂に徳川累代 朝廷恭順を志
も申徹不仕の身又お軍に實に恐歎懼懼と至るに其
以依る教後謹慎を社其の 清教罰に忌諱を觸るに及
以て其思入の如く由廣く言路を以て其家以付其申上

私家節之系元來徳門家臣僕以て之家謀蒙 汚者任以
より降てのりて爵秩を辱し以系に付 天恩之莫大者
さひあて給て不堪忘以給とも徳門家衰運之今日に玉
也累世之恩義を顧み以て家臣並列比府以極以ての君
父之懷慕するの節に相當て汚遣責をもて蒙蒙候令寛
宥之 憂慮をりつて汚咎の免進以とも又臣あて上に
てい穢又難惡事に汚在に殊に封縣の汚制度に汚在に
上の各藩陪臣に分由是まごの通て以て有る蒙存以て付
私ども家節以てい徳門家の降後仕汚國恩と蒙報方志
願以汚能い又願地之系忠悃 天體と蒙蒙且世汚改

華之抄柄に付社 石上の後と當然に汚多にて敬遠憾
を汚在にくむ何如か敢て上以下畏て志願格あて 皇
愍をりつて是と不似て士民とも飢渴を先進以て難有
仕合に甘み折 王政所一新世及汚運海の時れ齋^{アタ}又候
初はも君臣之分義を忘却しし私利を管て以極以て
い則天朝と蒙欺以候以て上の 汚天体と様し下の賊
臣之觀視を生して中我深く痛ん憂をり候也 天怒を
犯し味て弟死を願て以て只蒙蒙蒙蒙蒙蒙蒙蒙蒙蒙蒙蒙

五月

酒井



① 同藩届書

有罪の此と願ふは思言上仕の作今殺の事大變に立
到て以後も畢竟私ども不存存上電の事は行た中
上極も事涉危深く思入存を以て控へり 朝廷許裁許
ふもて有るは共從後之許家之許者罰を許給り私家
第之義に付又雨亭より別居へ通じ 朝廷へ哀訴仕
同是く許國を許下度皆か城地之義に許家へ返上
可仕若に西庭の法ども既之先殺上之を以て通て軍城に
以付今に介藩之者本城お固居り以て許を以て付を持て
之執歎於仕の同世候上以上

五月

酒井雅樂

○

五月朔日午の刻白門と白坂との間にて戦事お始り
軍の仙臺今津福崎二本松松合官軍の薩州長松長屯
双方多人殺りて大合戦也軍大勝利末の中刻仙臺勢
始介支て人殺後上は相成今津勢の勝に乘し退軍深
入りてい交換合より官軍打出し以故大に敗れ
し申の下刻惣勢引上りて双方討死二百人ほど怪
我人の殺不知とすは西庭に

○無題

失名氏

錦旗遥指北陸間、道路險危時又艱想像三軍歸思切落

花残白勿來関

○
 同日月廿七日を過ぎるに、武蔵松代之書松本、武蔵加那、
 又書薩長凡、曰、人許、又同日、米山、峠出、張、以、年、戦、に
 お成、又、言、回、書、既、人、討、死、介、の、不、洋、加、所、由、書、既、人
 討、死、士、分、曰、十、人、討、死、熱、勢、三、百、人、殺、討、死、子、負、の、準、を
 以、右、曰、書、十、分、交、戦、に、付、余、殺、脱、走、方、強、き、事、と、風、聞、有
 とい
 廿八日、の、書、お、分、不、中、以、以、以、由、又、こ、三、日、書、ま、ど、
 敗、走、し、五、書、薩、長、の、兵、の、間、を、入、進、し、入、れ、を、信、お

勢より脱走方と見透ひ薩長隊中へ大砲打つるも家
 人殺傷経換しの中、史以付お分、まよお成、又脱の出雲
 峠へ引上げ官軍方の柿崎推谷邊へ引上げ、以、よ、
 及如何、又お成、又、以、其、時、我、死、脚、の、者、到、着、の、活、し、以、
 成、い

或人曰脱走軍の出雲峠へ引上る、即ち官軍の
 柿崎推谷邊へ引上るとい、然るが、柿崎と推谷と
 い、其、地、に、廿、里、お、隔、多、柿、崎、の、米、山、の、近、方、と、い
 つ、も、推、谷、の、志、高、峠、を、思、ら、く、も、書、字、の、泚、り、或、を
 又、傳、聞、の、誤、り、故、く、存、し、と、後、信、を、傳、つ

大詰極と候と獲と骨折存在に交同四月廿七日於六時
何處にお放しに我混雜にて猛計にへとも大砲打始め
以に付双方を激々接戦にありび手お折取多し討死仕
以方退きて了中越に比ども先んぬ殺世候事届り上以
以上

五月三日

神原式部太補家来

岡島但馬

○

後四月上旬羽州戦争の事實地圖を加へる第四十一
節の詳説を明日開刊

神原式部



